

〈研究ノート〉

韓国済州島におけるイワシ業と住民の生活変化 ——楸子(チュジャ)島のフィールド調査を中心に

李 泳 采 (恵泉女学園大学)

はじめに

2015年5月、日韓国交正常化50年を機に、済州島で済州フォーラムが開催された。内海愛子特任教授(大阪経済法科大学)、羽田ゆみ子氏(梨の木舎社長)と共に済州島を訪問し、済州フォーラム参加(22日)、楸子(チュジャ)島訪問(23日)、4・3事件関連跡地めぐり(24日)を行った。済州島には何度も訪れたことがあるが、イワシをテーマにして済州島を訪れたことはなかった。4~5年前、故村井吉敬教授(早稲田大学)と共にイワシの視点から日本と韓国の海岸沿いを歩いてまわった。『エビと日本人Ⅰ・Ⅱ』(岩波書店)等がよく知られ、モノを通じて庶民の生活と帝国主義・植民地主義・グローバル化の問題を鋭く突いてきた村井教授が、なぜ最後にイワシに興味を持ったのか、未だに明確につかめていない。

村井教授と韓国の西海岸、南海岸、東海岸のほとんどの港を訪れ、その市場でイワシについてフィールド調査を行ってきた。その結果、多くの港に日本人移住漁村が存在していたことが分かった。朝鮮半島では、近代になっても漁民は半農半漁だったため、港に定着して生活をしたことはほとんどなかった。現在の韓国に形成されている多くの海岸都市は、日本人移住漁村と深い関係がある。

日本人移住漁村は、1876年の江華島条約以降、「任意移住型、季節移住型、定着移住型」の3段階で変遷していく。このテーマに関しては、関連研究(たとえば、布野修司『韓国近代都市景観の形成—日本人移住漁村と鉄道町』京都大学学術出版会、2010年)が多くあるため、ここでは論

じないが、主にイワシ業のために日本人漁民が多数移住していたことは、確かである。

伝統的に韓国では、イシモチなど見た目が綺麗な魚を食べてきた。カタクチイワシなどは、顎が凹んでいるなど見た目が悪いことから、災いをもたらす魚という迷信があり、ほとんど食べられてこなかった。しかし、現在では、韓国人の生活にイワシは欠かせない魚となっている。キムチにイワシの塩辛液汁を使用し、食用としてもよく消費されている。韓国人の生活においてイワシは、いつから大衆化してきたのだろうか。それは、日本との関わりが増え、日本人移住漁村が形成されて以降、日本による植民地化と、その後の植民地政策による影響であったという事実は、意外な発見であった。

韓国でイワシといえば、東海岸の機張ミョルチ(キジャンイワシ)が有名である。ところが、木浦や莞島など南海地方を歩いたとき、その地方で使われている塩辛用のイワシには、近海の康津(カンジン)産や済州島産のイワシが多いことが分かった。朝鮮半島は三面が海に囲まれており、どの海岸でもイワシはよく獲れ、近海漁業の主な魚種となっている。そのなかでも、機張と済州島のイワシは水産市場で代表的なブランドとして流通している。

今回、済州島の訪問の際に、済州島のイワシのなかでも「楸子島イワシ」が定番であることを知り、楸子島まで訪問することになった。本稿は、上述した問題意識に基づいて楸子島を直接訪問し、楸子島におけるイワシ業の現状を見るとともに、フィールド調査で判明した島の植民地史・社会史を簡単に整理した研究ノートである。村井教授がなぜイワシにこだわっていたのか、少し納得できたような気がした楸子島の

旅でもあった。

1. 楸子島の地政学的位置

(1) 楸子島の行政関係

楸子島は、済州島の最北西にある島で、上楸子島、下楸子島、秋浦島、横看島の4つの有人島と、38の無人島など42の群島で形成されている。1271年（高麗元宗12年）まで候風島と呼ばれていた。現在の楸子島と呼ばれるようになった起源としては、1821年に全羅南道嶺岩郡の帰属とされた頃から楸子島と呼ばれていたという説と、朝鮮太祖5年に島に楸子（マンシュウグルミ）の木が生い茂っていたため楸子島と呼ばれるようになったという説の二つがある。

楸子島は1821年（純祖21年）全羅道嶺岩郡から、1881年（高宗19年）済州牧に移管され、1896年には再び莞島郡に移された。さらに、日本植民地期の1914年、全羅南道莞島郡から済州島の管轄行政区域に編入されて、解放直後の1946年に北済州郡に移管されるなど、その行政における位置づけは非常に流動的であった。2006年7月1日に済州特別自治島制の実施により、済州市と北済州郡が統合され済州市楸子面に編入され、現在に至っている。町は、6つの里（大西里、永興里、黙里、新陽1里、新陽2里、禮草里）に分かれており、1,176世帯、2,200余名の住民が住んでいる。

(2) 豊富な魚類および文化遺産

楸子島周辺は、潮の流れが速く、水深が深く、岩盤層で構成された「清浄海域」（養殖業などのため海水の汚染を防止し自然状態で保護する水域）である。この地域の近海は、寒流と暖流が交差する海域で、昔から高級な魚類とされてきたイシモチ、サワラ、真鯛、石鯛、スズキ、ブリが回遊する朝鮮半島の黄金漁場として知られている。そのため、楸子島は「海釣りの天国」とも呼ばれた。無理に船で無人島まで行かなくても、楸子島を囲む海辺の岩場は釣りのポイントであり、季節を問わずに多くの釣り人らが集まってくる。

楸子島といえば、イシモチだけでなくサワラ、サバ、イワシが有名だ。特に、7月から始まる楸子島のイワシ漁は、島の真夏の光景として

欠かせない。島を歩きまわると、イワシの塩辛の壺なども非常に多く見られた。キムチを漬ける季節になると、イワシの塩辛は本土に飛ぶように売れていくという。しかし、現在は住民が減少し、外国人労働者も海上での漁業およびイワシ液汁づくりの仕事に従事しているという。

文化財としては、高麗の崔瑩（1316～1388）將軍祠堂（済州記念物第11号）、楸子処士閣（済州有形文化財第9号）などが有名である。また、済州市では、2010年6月に楸子島オルレ（ハイキングの道）が開設され、観光地として賑わっている。

(3) 上楸子島、下楸子島の関門「大西里」

楸子島では、現在、ピンクドルフィン号（済州－楸子－珍島－木浦）、韓一カーフェリー（莞島－楸子－済州）、楸子号（大西－秋浦－横看、離島間の路線）の三つの航路で、1日平均3～4便が運行されている。済州港から楸子島までは船で約1時間30分の距離で、運賃は大人12,500ウォン（約1500円）である。

楸子島を訪れた日は、お釈迦様生誕日の祝日にあたる3連休だったため、朝9時出発の楸子島行き船は、旅をする人や移動する島民で満席だった。週末や連休には、移動する人々で混雑するという。乗客には、中高年夫婦や団体観光客が目立った。

楸子島では、1945年の解放以降、新光号が木浦－済州間を週に1往復するようになったが、その船は上楸子島外港に寄港していた。長い間、船着場施設の不備により、旅客船から小船に乗り換えて島にたどり着くなど、危険な航海が続いていた。

楸子島の人口の大部分は、上楸子島大西里村に集中している。上楸子島には最大港である楸子港があるだけでなく、役所、漁協、郵便局、警察署、小学校、発電所、民泊、食堂、船具店、喫茶店、貯水地（3箇所）など生活に必要な施設が集中しているためである。

楸子港は、漁労作業に必要な施設がある済州・木浦へと向かう際の寄港地であり、同時に漁業の前進基地ともなっている。大西里と永興里の海岸沿いにある楸子港は、北西に発達した山並みが冬の北西風を防いでくれる天然要塞の港といえる。

(4) 済州島本島と湖南文化圏の中間文化地帯

楸子島は朝鮮半島の南海岸地方と近いため、数百年間にわたり行政区域と生活文化圏がいわゆる湖南圏(全羅道)に属していた。100年前に行政区域上、済州島に編入されてから済州島の付属島になっているが、生活風習から見ると、楸子島は全羅道の文化に近い。そのため、文化、風習、言語、住宅の構造などは、済州島本島とは違う文化として知られていた。

例えば、楸子島では、住民の言葉に全羅道訛りがある。おそらく長い間、全羅道の莞島郡に所属していたためであろう。また、済州島の人たちは節句の当日に祭祀を行うが、楸子島では前日の夜に祭祀を行う。そして、秋夕には朝に墓参りをして、女性たちは山や野原に出て民俗円舞を楽しむ。このようなことは、済州ではあまり見られない風習だという。物の運び方も異なる。楸子島の人々は、ほとんどが頭に物を乗せて移動するが、済州島本島の人々は背中に物を背負って移動している。済州島本島は、風がととも強く、物を飛ばされないようにするための工夫である。

このように楸子島は、済州島本島よりも全羅道文化圏の影響を受けてきたため、「済州島の中の全羅道」と呼ばれていた。実際に風俗や言語が全羅道と似ており、生活必需品の80~90%が木浦から持ち込まれたという。その影響で、排他的な済州島の人々は、湖南圏の楸子島を遠い存在と思っていたのではない。

上級学校への進学では、20年余前まではだいたい全羅道の学校を選んできたが、その後は済州島の学校を選ぶようになってきたようである。このことから、楸子島は両地域間における文化的な中間地域ということが分かる。楸子島の人々の生活文化は、済州島本島と、巨大な海を隔てて、本土の全羅道を結びながら形成された中間的な文化であると言える。

2. 楸子島と抵抗・差別の歴史

(1) 中世時代

楸子島は、朝鮮半島と耽羅国(済州島にあった旧王国)の中間にある交通の要衝地であった。楸子島にいつから人が上陸したのかは明確ではないが、島が大きく、海産物が豊富なた

め、高麗時代より以前とみられる。1271年、三別抄の乱が起こった時、高麗とモンゴルの連合軍が楸子島に入ってきたという記録がある。三別抄は全羅南道の珍島にある龍藏城が陥落した後、済州島に避難して南海岸一帯の島と海を回りながら官軍を攻撃した。この時、楸子島は三別抄の中間基地として使用されていた。一方、高麗とモンゴルの官軍も、済州島に陣営を置き、最後まで抵抗している三別抄を鎮圧するために、楸子島を拠点に進撃作戦を推進した。

このように楸子島は、朝鮮半島と耽羅の中間にある交通と軍事の要衝地であった。1273年頃、候風島として呼ばれていたのも、風がひどければ時期を待ち、また、風がなければ風が吹くのを待って船を浮かべたことから名付けられたとみられる。楸子島は、陸地と遠く離れた関係で倭寇の来襲を頻繁に受けていた。『耽羅紀年』によると、「1350年に楸子島住民を朝貢浦の川辺に移した。これは、倭賊がよく侵入するためだ」と紹介されている。以上のことから、楸子島は軍事的にも、交通的にも中間地としての地政学的な影響を受けてきた地域であると推測できる。

(2) 植民地時代の記憶と抵抗運動

楸子港に到着して旅客ターミナルで移動ルートを調べていたとき、日本語を話せる元容淳(ウォン・ヨンスン)氏(1933年生)と出会った。元氏は、戦前、楸子島に多くの日本人が暮っていたことを記憶していた。以下の内容は、元氏の案内で判明した楸子島における日本植民地時代の記憶と遺産である。

楸子島に定着していた日本人の正確な数は把握できなかったが、日本人は定住生活のために水道浄水施設を作った。楸子港の埠頭から東北方面に見える山の上部にその施設が残っていた。伝統的に楸子島の飲料水は雨水への依存度が高かったため、干ばつの時には生活に大きな不便があった。日本人のための水道浄水施設は3段に落下する方式で、水を流しながら浄水できるように作られていた。楸子島では、2003年になってようやく現代式の淡水浄水施設が建設され、2012年に高度浄水施設が完成されたことを考慮すると、植民地時代の日本人の生活は非常に安定していたことが分かる。

元氏の案内で海辺近くの日本人遊郭をみて、海

に接している海岸公園を登る。元氏の記憶によると、ここの海岸公園の跡地には当時日本の神社があった。戦前、毎週月曜日は村の中央にある小学校から海岸の神社まで、天照大神の名前が書かれた牌を奉じて、全校生徒が神社まで行進して参拝を行ったという。学校の先生は日本人が多く、ほとんどが長崎出身だった。1945年以降、先生が日本に引き揚げた後も、何回か手紙を交換していたが、元氏自身が島を離れ、移動の生活が多くなったため、写真や手紙などを捨ててしまい、現在は残っていないという。

日本植民地時代、水産資源に目をつけた日本人たちが大西里に陣を張った。そこに学校と組合を作り、主にサワラ漁に専念した。日本人による漁業の利権獲得が増えていくにつれて、島民との衝突事件も起こっていた。島には、いくつかの漁民抗日闘争の記録が残っている。

まず、「シワダ網事件」である。1926年5月14日、楸子島住民らが大挙して集まり、面長と楸子島漁業組合に抗議を行った。これに対し、木浦と済州から警察が押し掛けてきて、主導者21人が検挙、投獄された。漁業組合と村長などが共謀して、銀行からの借入金で漁具を買い入れて倍ほどの価格で販売した上、住民に海藻類を強制購入させたことに抗議した事件である。日本人たちが大型網で魚を一方向的に獲り、これに村が対応していた過程で生じた事件であったという。日本植民地時代の日本人漁民による収奪略奪漁業がもたらした悲劇であったといえる。

次は、上楸子島の「永興里漁民の抗日闘争」である。1932年5月に楸子島漁民らは、日本人の流し刺し網漁業による沿岸魚類の乱獲に反発し、日本人に抗議した。その結果、衝突事件が発生した。日本当局は、この時島民12名を検挙・投獄し、同年7月、漁民2名は騒擾罪で2年の懲役、残り10名は懲役6ヶ月、執行猶予2年の刑に処された。永興里の入り江には、それを記念する抗日闘争碑が建てられていた。

それ以外にも、楸子島の浜辺には済州島本島と同じく、日本本土決戦準備のための日本軍による海岸洞窟基地や防空壕などが多く発見されている。また終戦前後、楸子島付近で米軍の爆撃機の攻撃により日本軍備船が爆沈された事件などは、未だに島の人々の記憶に生々しく刻まれていた。

(3) 分断と反共による差別：楸子島スパイ事件

楸子島には、鬱陵島や江華島と同様に北朝鮮絡みのスパイ事件の悲しい歴史がある。元氏の案内で登った海岸公園の一角には、楸子島スパイ事件忠魂碑が建てられていた。スパイの名字が「元」氏だったのでその家を知っているのかと尋ねたら、スパイは元氏の叔父の息子（従兄）だった。

忠魂碑の記録によると、1974年5月20日、午後11時ごろ、北朝鮮武装スパイ3名が島へ侵入しようとした際、警備員に発見された。銃撃戦の末、武装スパイ1名は死亡、2名は海に逃げた。韓国側は警察含めて4人が死亡、3名が負傷したので、その英霊を追悼するために忠魂碑を立てたという。当時の新聞記事などを調べた結果、この楸子島スパイ事件をきっかけに、防衛態勢の弱い島嶼への北朝鮮の武装侵略を糾弾する全国集会や、英霊の追悼と反共愛国精神を高める追悼式が、済州島の全土で大々的に開催されるなど、島々の反共体制の強化に利用されていたことが分かった。

しかし、元氏の証言によると、当時の報道や忠魂碑の記録とは少し違う事件の背景が浮かび上がる。朝鮮戦争勃発の後、楸子島でも徴兵が行われ、元氏の叔父の家ではすでに結婚して家族も持っている兄弟2名が同時に徴兵されることになった。これに不満を持っていた従兄は、徴兵の途中、北朝鮮側へ越北をしてしまい、その後行方不明の状態のままであったという。

ところが、1974年に従兄が楸子島に突然現れ、北朝鮮へ妻や子どもを連れていくため、島に長期滞在していたところ、親戚の告発で摘発され、射殺された。1974年5月のこの事件が起きる前まで、元氏一家は島の中では、従兄が北朝鮮に越北していたことで、パルゲンイ（アカ）の家というレットルが貼られ監視されていた。「連座制」により進学や就職もできなかった。特に当局の許可なく遠洋漁船に乗ることが禁じられていたという。1974年の事件当時、元氏一家が自らその従兄を告発し、当時警察官であった元氏の親戚の一人がスパイを射殺したことで彼らは免罪符を得て、実質的な社会活動の自由が認められたという。

元氏は、日本植民地時代の生活と日本人による差別の記憶だけでなく、戦後済州島の本島や

韓国政府からの楸子島に対する差別の記憶も持っているようであった。くわしく語るのを控えていたので、その内容までは把握できなかったが、4・3事件による本島の差別問題が強調されているなか、本島による楸子島への差別が軽視されていることや、全羅南道に長く所属していたことから、島の人々の親戚に光州事件の被害者が多くいることで、島外で生活する楸子島の人々が光州の人々と同じ扱いをされた経験についても話してくれた。

楸子島に関する歴史的な資料をみるために楸子島面事務所に立ち寄ったが、休日で、かつ担当者が本土へ出張中だったので、歴史的な文献を見ることはできなかった。しかし、面事務所では、楸子島写真帖(済州島写真家協会発行)や新聞記事をもらうことができたので、この調査報告で活用することができた。

3. 島民の生活を支える楸子島のイワシ業

(1) 楸子島のイワシ業

楸子島の人々は、海上の小さな島の生活で貧困を宿命のように思って生きてきたが、彼らに夢と希望を与えたのは、カタクチイワシやサワラだった。楸子島の沖合では良質の高級魚がたくさん獲れる。そのなかでも、潮が最も引く時にカタクチイワシが多く獲れる。毎年春から8月までのカタクチイワシ漁は、楸子島の年次行事として欠かせない生業の一つだ。楸子島の付近のイワシは、銀色のカタクチイワシとして有名である。この銀色のカタクチイワシの群れを追ってきたサバが網にかかり、サバを追ってきたサワラが釣りや網にかかる。主にカタクチイワシ、サバ、サワラの三種類の魚が食物連鎖の順で楸子島の付近では多く獲れる。

三種類の魚の中で、カタクチイワシは塩辛の液汁として、サワラは食用として、楸子島の経済を支える最大の収入源である。カタクチイワシは、楸子港に近い牛頭島の海上、楸子橋を越えて楸子島の西側の海上、マンヨゴルと呼ばれる楸子島付近で最も潮流が早い南方の海上などが主な漁場だ。カタクチイワシが港で水揚げされると、待っていた女性たちや労働者らが塩辛とその液汁作業に取り掛かる。そして、夜明けごろになるとすでに塩辛の液汁に変わってい

る。楸子島の沖でのカタクチイワシ漁は、だいたい7~9月末が活況期である。たいてい「大人の人差指より少し大きいカタクチイワシが最上級」とみなされている。

(2) イワシの区分

カタクチイワシは水の外に出るやいなや、すぐに死んでしまい腐敗が始まる。そのため、産地ですぐに蒸して干した状態で流通されるが、市井にある生のカタクチイワシは、産地で一度冷凍させたもので、鮮度が落ちる。

カタクチイワシは、大きさや地方によって、いくつかの名前で呼ばれているが、済州島ではヘンオーという。全羅道ではメル、ミョルオチ、ミョルチともいう。大きなカタクチイワシはエンメリ、スンドンイ、小さいカタクチイワシはジャンサリ、ジリメン、カイリ、それ以外は、ノルメクキ、ドゥブンダリミョルチ、ジュンダリ、ヌントウンイ、グクスミョルなど多様だ。商品となるのは大きさによってデ(大)ミョル、ジュン(中)ミョル、ソ(小)ミョル、ジャ(子)ミョル、セ(細)ミョルなどに分けられる。

商人たちの間では「ジュッパン」と呼ばれる中間の大きさの白いカタクチイワシから、光が白くて形が整った大きいものを選ぶのがいいとされている。赤黒い色が出回るのは、脂が酸化して汚れたものだ。家庭でよく使うのは、5~7cm程度の中間の大きさのイワシで、それは出汁や炒め物、煮物にも適当である。料理をするとき、白くて極めて小さなカタクチイワシはそれだけを煮て、中間の大きさや大きいカタクチイワシはジャガイモや青唐辛子を混ぜて煮る。

(3) イワシ液汁をつくる方法

楸子島を歩くと、一般民家の周りにイワシ液汁を作る大きい樽が密封されたまま置かれている。獲れたイワシを船で樽に入れ、液汁は約2年間塩漬けのまま発酵させるという。島を案内してくれた元氏は夫婦で民宿を経営していた。そこで昼食をとりながら、食卓の様子を観察してみると、楸子島でイワシ液汁はまるで日本の醤油のように使われていることが分かった。

カタクチイワシの塩辛を漬けるためには、まず、生のカタクチイワシを洗って水気が完全に

なくなるのを待つ。壺に塩をふりながらカタクチイワシを重ねて入れて、一番上に塩を十分かけて日陰に置く。塩は、カタクチイワシの重さの約20%を目安にすると、適度な塩味が出る。

家庭では6月頃に漬けて、12月にキムチの漬け込みをする時に使うと最も適切だという。よく熟したカタクチイワシの塩辛は、調理しておかずとして食べたり、みじん切りにしてキムチに入れたりもする。しかし、キムチの色が黒くなるため、澄んだ液汁の塩辛を入れたり、カタクチイワシの塩辛を煎じて入れたりもする。

カタクチイワシの塩辛を長い間(約2年間)置いておけば、上に上澄みができるが、これをイワシ塩辛の液汁といい、浅漬けや青菜を漬けるときによく使われるという。家庭では、カタクチイワシの塩辛とその半分くらいの水を釜や鍋に入れて沸かしたら、布巾でこして下に集まった液汁を塩辛の液汁として使うという。

以前は、慶尚道と全羅道の南の地方でのみ、キムチにカタクチイワシの塩辛をたくさん使い、忠清道と京畿道、ソウル地方ではイシモチの塩辛を使ったが、今では全国的にカタクチイワシの塩辛を使う傾向にある。

(4) イワシ液汁の物物交換と 島民らの生活手段の確保

今は韓国全土に広がっているカタクチイワシの塩辛は、あまり畑で農業ができない済州島の人々の生活の中で伝統的に作られてきた。朝鮮半島の南海岸に接している慶尚道と全羅道の地方でも、カタクチイワシの塩辛がよく作られていることを考慮すると、済州島本島と本土の間に位置している楸子島のカタクチイワシの塩辛作りが、その両方に塩辛文化を広げた発祥地ではないかと推測できる。これにはもっと文化的な検証が必要だろうが、島の人々の生活環境には、そのようなイワシ塩辛文化の特徴がみられる。

済州島では、伝統的にカタクチイワシの塩辛とスズメの塩辛が作られていたようである。カタクチイワシの塩辛は、6月に漬けて、7月には味を出しはじめ、真夏になると重要なおかずになる。ふっくらと身が付いているイワシ塩辛は、真夏の最高の昼食のおかずだったという。済州島の人々は、カタクチイワシの塩辛を豆の葉に

包んで食べるが、慶尚南道の一部の地方では、真夏に取った大豆の葉を醤油や味噌に漬けておいて食べることもある。塩辛文化との類似性をみることができるだろう。

陸地の人々は豚肉を食べるとき、エビの塩辛で味付けをするが、済州島の人たちはカタクチイワシの塩辛を使用する。済州島の付属島である楸子島は、カタクチイワシ塩辛の液汁の産地としてどこよりも有名なところである。楸子島の塩辛文化の特徴は、その液汁がまるで醤油のように調理に利用されているところにある。

韓国全土の海岸でイワシはよく取れているが、その種類によって用途が違う。楸子島近海のイワシは、ほとんど中メルチ(中サイズのイワシ)で、銀色のものが目立つ。炒めておかずにするカイリ(小さいイワシ)ではなく、ほとんどが塩辛用として使われるサイズである。

楸子島は、小さい島で農業もあまり盛んではなく生活用品がほとんどないため、島の人々はイワシを獲って本土(全羅道)に行き、米や薪などの生活用品と物々交換をしてきたという。島の人々にとってイワシは、醤油のような日常の食卓に欠かせない調味料の材料でもあり、外部から生活必需品を購入してくる唯一の輸出品でもあったのである。まさに、イワシなくしては島の人々の生活と生存が成り立たなかつたといっても過言ではないほど、イワシは「民衆のための魚」であったといえるかもしれない。

(5) 楸子島のイワシ漁の唄

(イワシを獲るときに歌う唄)

楸子島のイワシ漁が島の重要な産業であったことから、人々がイワシ漁に関わりながら労働意識を共有する歌の文化も同時に発達していた。楸子島でカタクチイワシを獲る時に歌う民謡は、その民衆の労働と生活の融合をよく見せている。

楸子島に伝わっている「イワシ漁の唄」は、「錨上げる音」、「櫓をこぐ音」、「カタクチイワシの追う音」、「ドンデジル(돈대질)の音」(獲ったイワシを船にあげる時の歌)、「カレジル(가래질)の音」(網からイワシを生け簀に入れる時の歌)、「サンサ(상사)の音」(「楸子島のサンサの音」、共同で労働をするとき興を促す歌)など、六つの民謡で構成されている。

イワシ漁の唄は、ある人が先に音を歌うと、何人かの人がりフレインして歌う。イワシを獲る作業は主に男たちがしたが、「櫓をこぐ音」や「イワシの追う音」、「ドンデジルの音」を除いて、「カレジルの音」や「サンサの音」は女性も一緒に歌った。

イワシ漁をする時に歌う民謡は、他の地方でも船に乗った人たちを中心に歌われるようになる。楸子島でもイワシ漁は非常に重要な生計手段だったため、楸子島のイワシ漁の歌は楸子島住民たちに非常に親しまれていた。ところが、済州本島の音とは違う全羅南道民謡圏に近い調子の構造であるとして区別され、これまで済州島では高く評価されてこなかった。しかし、楸子島のイワシ漁の唄は、済州本島と本土にまたがる中間文化圏で育まれた文化資源として、両岸の地域に躍動性と融合を吹き込んだという評価を受けるにふさわしいだろう。

おわりに

イワシ、イシモチ、サワラ漁によって楸子島の経済が活況を呈した時には、島の人口が6,000名を超えた。しかし、10年前からイシモチ漁の漁船が一隻ずつ済州道に拠点を移してから楸子島の人口が半分減ったという。以前は、楸子島でもそれほど不便を感じずに暮らせたが、今では子どもの教育や医療、交通など各種の利便のために、済州島本島に行く人々が増え、島に定着する人々が減っているという。そのため、イワシ漁の時期になると島の人々だけでは労働力が足りず、最近では外国人労働者が増えているようである。

筆者は全羅南道地域で育ったので、周りに済州島の人々も多くいたし、楸子島の名前は幼い頃からよく聞いたことがあった。だが、実際にその島がどこに位置しているかを認識したことはなかった。イワシを追いかけながら済州島と楸子島と全羅道地域の関係が見えてきたとき、南道地方に楸子島が知られていたのは、そのイワシ塩辛の影響によるものであったのだと気づかされ、改めてイワシに対する親しみを感じることもできた。

偶然訪問した楸子島であったが、その近現代における悲劇の歴史、潮流と地政学的な関係で

移動する島の人々の生活圏、そして民衆の生活の底辺で一緒に生きてきたイワシの存在に驚いた。しかし、そのイワシ漁の本格的な始まりには、日本の朝鮮への進出と、日本による朝鮮の水産業の近代化の影響が大きかったことを考えると問題が複雑に見えてくる。島民は伝統的な生活と、外部からの近代化の影響をどう融合していったのだろうか。楸子島の人々の事例は、それが単純な植民地支配の搾取と近代化論理だけでは説明できない複合的な特徴を感じさせるものでもあった。

今回の調査では、楸子島における日本人移住村の具体的な状況、楸子島イワシの塩辛(液汁)文化と日本の塩辛文化との関係などを調べることはできなかった。今後、日本側にある楸子島に関する資料を調べながら、楸子島のイワシ文化を日韓比較の視点で再度考察してみたい。